

# 小塩

禪竹作

季は	地は	後	前
シテ	ワキ		
在原業平	前に同じ	樵の翁	都の人
三月	山城		

「花にうつろふ嶺の雲。く。かゝるや心なるらん。」

詞  
「かやうに候ふ者は。下京辺に住居する者にて候。」

さても大原野の花。今を盛りなる由承り及び候ふ  
あひだ。若き人々を伴ひ申し。唯今大原山へと急  
ぎ候。」

サシ  
「面白やいづくはあれど所から。花も都の名にし負  
へる。大原山の花桜。」

歌  
「今を盛りと木綿花の。く。手向の袖もひとしほ

に。色そふ春の時を得て。神もまじはる塵の世の。  
花や心にまかすらん。く。」

シテ一聲  
「しをりして。花をかざしの袖ながら。老木の柴と  
人や見ん。」

サシ  
「年ふれば齡は老いぬしかはあれど。花をし見れば  
物思ひも。なしとよみしも身の上に。今白雪を戴  
くまで。光りにあたる春の日の。長閑けき御代の  
時なれや。」

歌

「散りもせず。咲きも残らぬ花ざかり。く。四方

のけしきも一しほに。にほひ満ち色にそふ。情の道にさそはるゝ。老な厭ひそ花心。く。

ワキ詞  
「ふしきやな貴賤群集の其中に。ことに年たけたる老人花の枝をかざし。さも花やかに見え給ふは。そもそも何くより來り給ふぞ。

シテ  
「思ひよらずや貴賤の中に。わきて言葉をかけ給ふは。さも心なき山賤の。身にも応ぜぬ花ずきぞと。

地  
お笑ひあるか人々よ。姿こそ山のかせきに似たりとも。心は花にならばこそ。なさばならめや心からに。

「をかしこそは御覽ずらめ。よしや此身は埋木の。朽ちは果てし無や心の。色も香も知る人ぞ。知らずな問はせ給ひそ。

ワキ詞  
「あら面白のたはぶれやな。よも誠には腹立ち給はじ。いか様故ある心言葉の。奥床しきを語り給へ。

シテ詞

「何と語らん花盛り。いふに及ばぬけしきをば。い

かゞは思ひ給ふらん。

ワキ 「げに／＼妙なる梢の色。うつろふ影も大原や。

シテ詞 「小塩の山の小松が原より。煙る霞の遠山桜。

ワキ 「里は軒端の家ざくら。

シテ 「匂ふや窓の梅もさき。

ワキ 「あかねさす日も紅の。

シテ 「かすみか。

ワキ 「雲か。

シテ 「八重。

ワキ 「九重の。

地 「都辺は。なべて錦と為りにけり。／＼。桜を織ら  
ぬ人し無き。花衣着にけりな。時も日も月もやよ  
ひ。逢ひにあふ詠めかな。げにや大原や。小塩の  
山も今日こそは。神代も思ひ知られけれ。／＼。  
「かゝる面白き人に參りあひて候ふ物かな。此ま、

御供申し花を詠めうづるにて候。又唯今の言葉の  
すゑに。大原や小塩の山も今日こそは。

詞  
「神代の事も思ひ出づらぬ。今所から面白う候。是  
は如何なる人の御詠歌にて候ふぞ。

シテ詞

「事あたらしき問事かな。此大原野の行幸に。在原  
の業平供奉し給ひし時。かたじけなくも後の御事  
を思ひいで。神代の事とはよみしとなり。申す  
につけて我ながら。空おそろしや天地の。神の御  
代より人の身の。妹背の道は浅からぬ。

地

「名残をしほの山深み。く。のぼりての世の物語。  
かたるも昔男。あはれ旧りぬる身の程。歎きても  
かひなかりけり。歎きてもかひぞなかりける。  
げに山賤のさしもげに。しわふるびとゝ見ゆるに  
も。心ありける姿かな。

ロシギ地

シテ  
「心知らればとても身の。姿に恥ぢぬ花の友に。馴  
れてさらばまじらん。

地 「まじれやまじれ老人の。心若木の花の枝。

シテ 「老隠るやとかざゝん。

地 「かざしの袖を引き引かれ。このもかのもの陰ことに。

シテ 「貴賤の花見。

地 「輿車の。花のながえをかざしつれて。よろぼひさぞらひ。とりぐにめぐる盃の。天も花にや酔へるらん。紅うづむ夕霞。かげろふ人の面影。あ

りと見えつゝ失せにけり。 く。 (中入)

ワキ詞 「ふしぎや今の老人の。唯人ならず見えつるが。さては小塩の神代の古跡。和光の影に業平の。花に詠じて衆生済度の。姿顕はし給ふぞと。

歌 「思ひの露もたまさかの。 く。 光りを見るも花心。妙なる法の道のべに。猶も奇特を待ち居たり。 く。

後ジテ 「月やあらぬ春や昔の春ならぬ。我身ぞ本の身も知

らじ。

ワキ 「ふしぎやな今まで。立つとも知らぬ花見車の。やごとなき人の御有様。是は如何なる事やらん。

シテ 「げにや及ばぬ雲の上。花の姿はよも知らじ。

詞 「有りし神代の物語り。姿顕はすばかりなり。

ワキ 「あら有難の御事や。他生の縁は朽ちもせで。

シテ 「契りし人も様々に。

ワキ 「思ひぞいづる。

シテ 「花も今。

地 「今日こずは。あすは雪とぞ降りなまし。く。

消えずはありと。花と見ましやと詠ぜしに。今は  
さながら花も雪も。皆白雲の上人の。桜かざしの  
袖ふれて。花見車くるゝより。月の花よ待たうよ。  
「それ春宵一刻価千金。花に清香月に陰。惜しまる  
べきは只此時なり。

地クリ

シテサシ 「思ふ事いはで唯にや止みぬべき。

地

「我にひとしき人しなければ。とは思へども人しぬ。心の色はおのづから。思ひ内より言の葉の。露しなぐに洩れけるぞや。

クセ  
「春日野の。若紫のすり衣。しのぶの乱れ。限りしらずもと詠ぜしに。陸奥の忍ぶもぢずり誰故。乱れんと思ふ我ならなくにと。よみしも紫の。色に染み香にめでしなり。または唐衣。着つゝ馴れにし妻しあれば。はるぐきぬる旅をしそ。思ふ心

の奥までは。いさ白雲のくだり月の。都なれや東山。是もまたあづまの。はてしなの人の心や。

シテ

「むさし野は。今日はな焼きそ若草の。

地  
「夫もこもれり我もまた。こもる心は大原や。をしほにつゞく通路の。ゆくへはおなじ恋草の。忘れめや今も名は。昔男ぞと人もいふ。

シテ  
「むかしかな。(序の舞)

ワキ  
「昔かな。花も所も月も春。

地 「ありし御幸を。

シテ 「花も忘れじ。

地 「花も忘れぬ。

シテ 「心やをしほの。

地 「山風ふき乱れ。散らせや散らせ散りまよふ。木のもとながらまどろめば。桜に結べる。夢かうつか世人定めよ。く。寝てか覚めてか春の夜の月。曙の花にや残るらん。